まちの主役 MADE IN SHIMONOSEKI

元高校美術教諭 **波多野輝男** さん

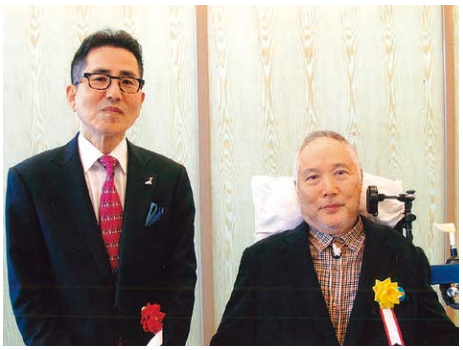
難病で左目の視力をほとんど失いながらも、昨年、第8回富弘美術館詩画公募展で、応募した作品が大賞に次ぐ優秀賞に輝いた波多野輝男さんを紹介します。

## 人は、自然や人々への感謝の中で生き生かされている

### 絵を通して生きる希望を

波多野さんは、高校卒業後、金融機関に勤務していました。しかし、もともとやってみたかった高校の美術教師を目指して退職。大学で美術を学び、念願の高校教諭となりました。

高校では、カリキュラム以外に、金子みすゞのいろいろな詩を生徒に紹介して、詩からイメージする造形作品を作る授業もしました。水彩画をベースに、毛糸や針金、糸などを使って詩を表現します。造形や詩を通して生きる尊さを伝えたかったと波多野さんは当時を振り返ります。難病を患っていた生徒も、この授業を通じて、生きる希望を持ったそうです。



▲星野富弘さん（右）と授賞式にて（2015年）

充実した教員生活を過ごしていましたが、体調を崩し、25年の教員生活にピリオドを打ちます。

### 詩画が支えに

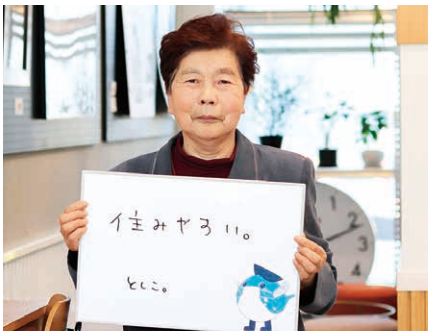
退職後、子どもと関わることがあり「子どもの絵と大脳の働き」などの講演をしながら療養していました。この時の支えとなったのが、富弘美術館詩画公募展に出す作品を作ることでした。

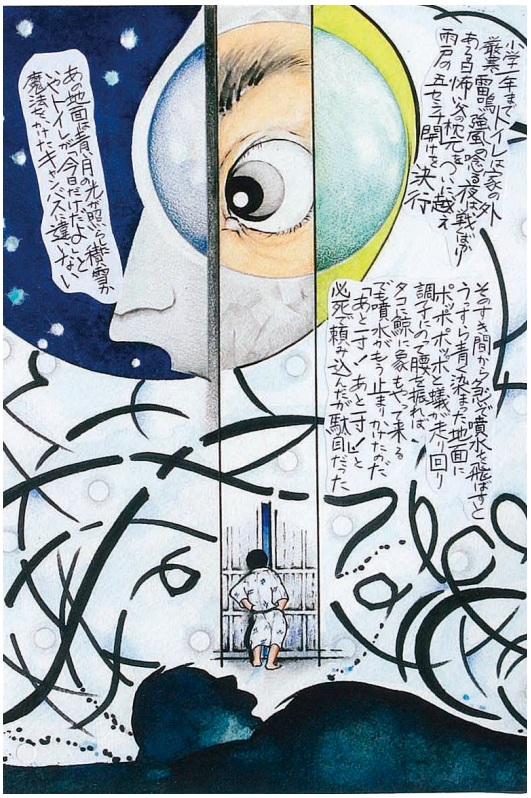
富弘美術館は、星野富弘さんの作品を一堂に公開している美術館です。波多野さんは、30年前に星野さんの自伝を読んでいましたが、作品を描くにあたり、これを読み返しました。不慮の事故で手足の自由を失いながらも、寝たきりの床から這い上がり、口に筆をくわ

## まちかどボイス

今月のテーマ

### 下関の良いところ






◀「トイレがくれた魔法のキャンパス」2020年第8回富弘美術館詩画公募展優秀賞受賞作品。

▶2021年の公募展に向けて、作品を制作中の波多野さん。1月の大雪がヒントになっています。

えて書や絵を表現する精神の強さに改めて感動しました。

公募展には1回目から応募し、2回目と3回目には奨励賞を受賞。受賞者は富弘美術館に招待され、そこには星野さんも。初めて星野さんにお会いした時「感動と驚きで声が出ず、目の前に星野さんがいることが信じられませんでした」と波多野さん。

8回目となる昨年、624点の応募の中から大賞に次ぐ優秀賞を受賞。「一つのことをコツコツと続ける大切さを感じました」と、感慨深げに波多野さんは話します。

公募展のテーマは「いのちの尊さ・いのちの輝き」。題材を探す中で、人や自然に自分が支えられていることを感じ、回数を重ねるたびにより深い作品を作ることができるようになったそうです。

波多野さんは、難病で左目がほとんど見えなくなりました。「右目が見えるありがたさを感じるまで時間がかかりましたが、星野さんからの学びは隠せません」と話します。

「これからも詩画を描き続け、星野さんと初めてお会いした感動や、詩画から学んだ『人は自然や人々への感謝の中で生き生かされていること』を、子どもたちに伝える講演ボランティアをしていきたいです」と、熱い思いを語ります。

## 編集後記

■下関国際高等学校野球部の皆さんセンバツ出場決定おめでとうございます。甲子園という大舞台での活躍を期待しています。（き）

■下関市の地域資源を生かした商品が今年度も開発されています。商品をとおして下関の魅力が多くの方に伝わるといいなと思います。（と）

■波多野さんの描く詩画には、自然のたくましさ、美しさが洗練された言葉と絵で表現されていて素晴らしいです。（ひ）